群教セ	H01 -01
	平 14.207 集

安心して自分のやりたいことに取り組むための援助の考察

── ３歳児のけんかやいざこざの場面における育ちの分析を通して ──

特別研修員　　髙井　茂里　（宮城村立宮城幼稚園）

《研究の概要》

本研究は、幼児が安心して自分のやりたいことに取り組むためには、３歳児のけんかやいざこざの場面で何が効果的であったのか、教師の援助に考察を加えたものである。具体的には、３歳児、Ａ児・Ｂ児二名の抽出児のけんかやいざこざの場面を振り返り、幼児の変容の姿と育ちを分析し、幼児が安心して自分のやりたいことに取り組むために、何が効果的であったのか、教師の援助に考察を加えた。

【キーワード：幼児教育　３歳児　けんかやいざこざ　育ち　教師の援助】

Ⅰ　主題設定の理由

少子化、核家族化が進み、家庭や地域の中で人とかかわる経験が少ないまま育ってきている幼児が多くなっている。そのため、自分の気持ちを表すことが難しい幼児や、自分の主張はするが相手の気持ちに気付くことが苦手な幼児も多く、人とのかかわり方に個人差が出てきている。子どもたちにとって「初めての小さな社会」である幼稚園では、遊具は共有であり、教師も独占しているわけにもいかず、園生活を送っていく上で友達とのぶつかり合いは避けられない。３歳児は発達段階から見ても、何事にも興味を示し何でもやりたがる、自己中心的でこだわりがあるなどの特徴があげられる。また、自分の気持ちを言葉よりも態度（行動）で表現することが多く、感情もストレートに出す。様々な理由から起こるけんかやいざこざを繰り返し、教師に援助してもらいながら乗り越えて、自分なりに納得して遊ぶ、自己を実現して遊ぶなど、安心して自分のやりたいことに取り組んでほしいと思う。また、友達の存在に気付き、みんなの物は順番で使う、やってよいことや悪いことがあることに気付く、幼稚園では自分の思い通りにならない事もあるなど、友達とのかかわり方が少しずつでも分かるようになってほしいと考える。一般的には、けんかやいざこざは起こらないに越したことはないと考えられがちであるが、それらの経験による挫折（ざせつ）や葛藤（かっとう）こそ心の育ちにつながるとても大切な機会であると考える。

本学級は、男児 11 名、女児 10 名、計 21 名の３歳児の学級である。ほとんどの幼児が入園前は家庭で過ごし保育経験がなく、集団生活を送るのは初めてである。入園から二カ月以上たった現在では、個人差はあるが、ほとんどの幼児が喜んで登園し、幼稚園生活になじんできている。友達とのかかわりも見られるようになってきているが、教師と一緒に遊んだり同じ場にいても別々の遊びであったりすることが多い。自分のやりたい遊びに取り組む中での遊具などの取り合い、主張の食い違い、順番争いや場所の取り合い、言葉で表現できず手や足が出てしまうなど、けんかやいざこざは絶えない。

今まで、けんかやいざこざが起こると気持ちを受け止め、互いの気持ちややってはいけないことなどを伝える援助は心がけてきた。しかし、幼児語であったり原因や状況がうまく説明できなかったりすることの多い３歳児では、泣きやますことばかり考え、違うことに気持ちを向けさせてしまったり、「ごめんねを言おうね」などと、うやむやにしてしまったりしていたことが多々あった。３歳児なりに自分のせいで泣いたり、怒ったりしている友達を見て「しまった」「悪いことをしてしまった」という気持ちの表情がうかがえることもある。

そこで､実際に生じたけんかやいざこざの場面を振り返り､幼児の変容の姿と育ちを分析し、幼児が安心して自分のやりたいことに取り組むために、何が効果的であったのか、教師の援助に考察を加えたいと考えた。

II 研究のねらい

１学期から２学期に生じたけんかやいざこざの場面を振り返り、抽出児の変容の姿と育ちを分析し、幼児が安心して自分のやりたいことに取り組むために何が効果的であったのか、教師の援助に考察を加える。

III 研究の方法

１　入園当初けんかやいざこざの多かった二名の幼児Ａ児・Ｂ児を抽出し、けんかやいざこざの場面の実践記録を集積する。

(1)　期間　　５月～11 月

(2)　教育課程＜年間指導計画＞

	○ねらい　　・けんかやいざこざの場面の教師の援助（抜粋）
＜１期＞ ４月 ～ ６月中旬	○幼稚園や先生に親しみをもち、喜んで登園するようになる。 ○幼稚園での生活の仕方を感じ取っていくようになる。
	・遊びの中で自分の思いが通らなかったり、物の取り合いなどでトラブルが起きたりした場合は、気持ちを受け止めたり気分転換を図ったりしていく。
＜２期＞ ６月下旬 ～ 10 月中旬	○自分のしたい遊びを見つけて楽しむようになる。 ○園での生活の仕方がわかるようになる。
	・教師が「ありがとう」「ごめんね」「貸して」「入れて」「いいよ」など、やりとりのモデルとなるように言葉を使ったり､場面をとらえて知らせたり、代弁したりしていく。
＜３期＞ 10 月下旬 ～ ３月	○友達と遊ぶことに興味をもち、友達に親しみをもつようになる。 ○いろいろな遊びに興味をもち、幼稚園で楽しく過ごすようになる。 ○基本的生活習慣の中で自分でできることは自分でするようになる。
	・トラブルが起きたときに、互いの言い分を十分に言い合えるように見守り、互いの思いが伝わるようにしたり、納得して気持ちの立て直しができるようにしたりしていく。

(3)　抽出児　　宮城村立宮城幼稚園　３歳児

Ａ児・・・自分の思いがうまく表現できない幼児。Ａ児の気持ちを受け止め生活や遊びに必要な言葉ややってよいことや悪いことなどを伝え、集団生活の過ごし方や友達とのかかわり方が分かるようになってほしい。

Ｂ児・・・明るい性格で積極的に友達とかかわろうとするが、自己主張が強い幼児。幼稚園では、時には我慢したり譲ったりしなければならないこともあることを伝え、気の合う友達と楽しく遊べるようになってほしい。

２　集積した記録の中から、次の点を満たすエピソードを選び出す。

(1)　けんかやいざこざの場面で、下記のような幼児の変容が見られ育ちが感じられたもの

○　友達の存在に気付く

○　みんなの物は順番で使う
○　やってよいことや悪いことに気付く
○　幼稚園では自分の思い通りにならないことも時にはあることが分かる
○　友達の気持ちを考えようとする　など

(2)　場面が教師の心に特に印象に残ったもの

3　それぞれ抽出した幼児のけんかやいざこざのエピソードを整理する。

(1)　けんかやいざこざのエピソード（幼児の姿と教師の援助）

(2)　考察の視点

☆　幼児の変容の姿と育ちの分析（幼児の中に育ったと思われること）

◎　教師の援助の有効性（幼児が安心して自分のやりたいことに取り組めたか）

4　二人の抽出児のエピソード全体を通して分かったことをまとめる。

Ⅳ 研究の内容

1　A 児のエピソードと考察

①･･･教師

エピソード1　「ほら！アンパンマンだよ！」　＜6月中旬＞

A児がE児の持っていた広告紙を丸めた剣をいきなりとってしまう。E児が泣いて①に訴えてくる。①が「AちゃんEちゃんの剣とった？」とA児に聞くと黙ったままでいる。A児の気持ちを察し「Aちゃんもほしいの？」と聞くと「うん・・・。」と答える。「でも、この剣はEちゃんのだから黙ってとっちゃだめだよね。」と話すと黙ったままで、後ろ手に剣を持って首を横に振っている。E児に「Aちゃんがこの剣ほしいんだって。」と話すがE児も「だめ。」と言って怒っている。「じゃあ、Aちゃん、先生が同じの作ってあげる。」と剣をE児に返して、広告紙で同じような剣を作ってやる。A児に「これでいい？」と聞いても「いや。」と首を横に振っている。「じゃあ、おまけにAちゃんの好きなアンパンマンかいてあげる。いいなぁ。いいなぁ。アンパンマンだよ。ほーらアンパンマン！」と気分を盛り上げる。A児はとてもうれしそうに作ってもらった剣をE児に見せに行く。

＜考察＞

☆　新しいものに目ざとく反応するＡ児はＥ児の持っていた剣でなくても、教師の作った剣で『これならいいだろう』と納得できた。それは、友達の物を何が何でもほしいと思う気持ちが和らいできたからであると考える。また、Ｅ児に教師に作ってもらったアンパンマンの絵入りの剣を見せに行ったのは、自分のうれしいという思いを伝えたい気持ちが出てきたからではないかと考える。

◎　最初はＥ児の剣をまねて作ったが気に入ってもらえなかった。目新しい物にすぐに興味を示すＡ児であったので、Ａ児の気を引こうとアンパンマンの絵を描いてみたところ、とても喜んだ。また、Ｅ児に剣を見せに行ったのは広告紙を丸めた剣にＡ児の好きなアンパンマンの絵を描いたことや気分の転換が図れるような雰囲気作りをした教師の援助が有効だったと思われる。

エピソード2　「ほら、一緒に言おう！」　＜6月下旬＞

ブロックで遊んでいたK児が泣きながら「先生、Aちゃんがブロックとったぁ。」とA児をたたいて訴えている。①は、泣いて取っ組み合いになってきたので、引き離す。「Kちゃんのブロックが欲しいの？」と聞くが、A児は黙ったままでいる。「Aちゃん、欲しかったら『貸して』って言うんだよね？ほら、一緒に言おう。」A児も一緒に「貸して！」と言う。すると、K児も「いいよ。」と譲ってくれる。「Kちゃん、えらいね。貸してあげられるなんて。」「Aちゃん、ほら『ありがとう』って一緒に言おう。」A児も一緒に「ありがとう！」と言う。K児の

ブロックがなくなってしまったので「じゃあ、Kちゃん、このブロック貸してあげる。」と籠の中にあるブロックを手渡す。K児も「うん、ありがとう。」とお礼を言う。A児は思いがかなうとK児と同じ場所で遊ぶことができ、何事もなかったように二人ともブロック遊びを続ける。

＜考察＞

☆　A児は自分の思いが通らないとたたいたり、ひっかいたりしてしまって「貸して」も言えなかったが、教師と一緒に素直に「貸して」と「ありがとう」が言えた。友達の使っているものが使いたいときには「貸して」と言うこと、貸してくれたら「ありがとう」を言うことが分かってきたようだ。また、K児のそばで、同じ雰囲気を味わいながら遊ぶことができたのは、友達のそばで遊びたい気持ちが出てきたからであると考える。

◎　A児が「貸して！」と「ありがとう」が言えたのは、教師が一緒に言った援助が有効だったと思われる。また、二人が、同じ場で同じ雰囲気を共有しながら遊び始められたのは、A児はブロックを貸してもらえ、K児は違うブロックを使うことができ、互いに自分の納得のいくブロックが手に入ったからだと考えられ、両者の思いに折り合いを付け、修正した教師の援助が有効だったと思われる。

エピソード3　　「やさしくしてあげられるよね」　　＜10月中旬＞

長いすに座っているD児を押してA児が座ろうとしている。D児が怒って押し返すとA児はほほをひっかいて泣かしてしまう。D児が「わ～ん！先生Aちゃんがひっかいた。」と泣きながらⓉにしがみついてくる。見るとほほから血が出ている。ⓉはD児を抱き上げ「Aちゃん、見て血が出ている。」とA児の所へ行ってひっかいた傷を見せる。「Aちゃん、だれがしたの？」「どうしてひっかいちゃったの？」と聞くとA児は「A・・・。」「ここ。」と言ってD児の座っている所を指さす。「ここに座りたいの？」と聞くと「うん。」と答える。「でも、こんなにひっかいたら痛いよねぇ。Aちゃんだってひっかかれたら痛いでしょ？血が出ちゃったよ。痛そうだね。」と話すと黙っていたが、「ごめんね。」と謝る。D児も「いいよ。」と許すことができ、友達に詰めてもらい、一緒におやつを食べる。

何日か後、長いすにS児が座ろうとしているところにA児が走っていき、S児の手を引っ張って自分の隣に座らせようとしている。S児は何も言えず泣き出してしまう。Ⓣが「AちゃんはSちゃんのことが大好きで一緒に座りたいんだって。」とS児に話すが泣いたままで体を横に振っている。「SちゃんはAちゃんがこの間Dちゃんひっかいちゃったでしょう？Sちゃんもひっかかれたらいやだと思っているんじゃないかな？」とA児にS児の気持ちを察し伝えると「しな～い！」と答える。S児に「Sちゃん、Aちゃん何もしないって。」と伝え「Aちゃんやさしくしてあげられる？」とA児に話す。A児は「うん！」と言ってS児の頭をなでる。S児が少々不安そうであったので、教師も隣に座ると、A児とS児は並んでおやつのジュースを飲むことができた。

＜考察＞

☆　A児は今まで、友達に素直に「ごめんね」と謝れなかったが、D児に「ごめんね」を言うことができた。それは、自分もひっかかれたら痛いこと、D児に悪いことをしてしまったことがA児なりに分かってきたと考える。

◎　A児が「ごめんね」を言えたのは、D児の血の出ている傷を見せ、D児の痛さを伝えた教師の援助が有効であったと思われる。また、D児と並んでおやつが食べられたのは、素直に謝ることができたことと、A児の座りたい場所を受け止め、そばにいる友達に詰めてもらった教師の援助が有効だったと思われる。

☆　A児は、あまり友達とのかかわりが見られなかったが、自分の好きな友達ができ一緒に座っておやつを食べたいと思い、S児の手を引っ張った。やさしくすると教師と約束をしたり、S児の頭をなでたりすることができたのは、友達が嫌がることはしてはいけないということがA児なりに分かってきたからだと考える。

◎　A児とS児が一緒に座ってジュースを飲むことができたのは、両者の気持ちを教師が読み取り伝えたことでA児はS児にやさしくすると約束し、S児が安心して座れるよう教師がそ

ばに座った援助が有効だったと思われる。

エピソード4　　「どうするかな？」　　＜11月上旬＞

ブロックで遊んでいたA児が、Ｉ児の持っている釣りざおを見つけると走って行ってとろうとする。Ｉ児は「Aちゃん、だめ。Ｉの！Ｉの！」と大きな声で叫んでいる。今にもA児は手が出そうである。そばにいた副担任がとっさに釣りざおの真ん中を持って、A児が手を出さないように防いでいる。副担任がしばらく黙ったままでいるとA児は、釣りざおの引っ張り合いをやめ、今までしていたブロックコーナーに戻って遊びを続ける。

＜考察＞

☆　A児が釣りざおをあきらめることができたのは、I 児と釣りざおの引っ張り合いをしながら教師の顔を見て、友達をたたいたり、ひっかいたりしてはいけないことを思い出せたからであろう。また、教師の思いが通じたのか、A児は手を出すことなく釣りざおをあきらめて、ブロック遊びを続けた。A児なりに我慢し、やってはいけないことが分かってきたのではないかと考える。

◎　A児もけんかやいざこざの場面で、友達に手を出すことが少なくなってきていたので、副担任と相談して少し見守ってみることにしていた。危険のないように釣りざおの真ん中を持っている副担任も教師も、しばらく見守っていた。A児にとっても、自分のしていることを考える時間ができたようである。すぐに口添えしたり、止めたりしなかった教師の援助が有効だったと思われる。

2　B児のエピソードの分析と考察

エピソード1　　「順番こだよ」　　＜5月中旬＞

帰りのバスに乗る（黄色コース五人）汽車ぽっぽの先頭争いを「Bちゃんが先！」「Nちゃんが先！」とB児とN児がしている。Ⓣはしばらく見守っていたが、「じゃあ、みんなで仲良しさんで行こう。」と一人一人の手をつながせ「いいな。いいな。みんな仲良しさん！」など言いながら五人みんなで手をつないでバスまで行く。
何日か汽車ぽっぽや仲良しさんでバスまで行くことが続くが、今度は仲良しさんの時にⓉと手をつなぎたい友達でいざこざがある。「Bちゃんが先生と！」「Fが先生と仲良しさん！」とB児とF児が言い合っている。Ⓣが『昨日はBちゃんだったから･･･』など順番を促したり、ジャンケンを提案したりしたが、みんな納得がいかない。「じゃあ、この指はBちゃん。この指はFちゃん････エプロンはTちゃん。」と両手に二人ずつとエプロンに一人つかまり、固まってバスまで行く。
B児が一番先頭にいるN児を無理やり引っ張り「Bが一番！」と先頭に並んでしまいN児は戸惑っている。その様子を見たⓉが「Bちゃん、Nちゃんの方が先に並んでいたよね？」と聞くと「Bは一番がいいの！」と答える。「でも、Nちゃんが一番に並んでいたよ。」と話しても「でも、Bちゃんが一番がいいの！」と答えてくる。N児も「Bちゃんはいつも一番だよ。」と怒っている。「Bちゃんは一番がいいんだって。どうする？」とN児に話すと「Nちゃん、Bちゃんが一番でも我慢する。」と一番を譲る。「Nちゃん、えらいね。ありがとう！」と抱きしめ「Bちゃん、後ろも楽しいよ。順番こで一番になろうね。」と話すがB児は黙ったままであった。
何日か経ったある日、いつものようにB児がN児を押しのけ一番になろうとしている。N児が「Bちゃん、ずるい！Nちゃんの方が早かったよ。」と指摘すると、「だってBちゃんが一番！」と言ったが、Ⓣの顔を見ながら少し考え「順番こで一番になろうね。」と一番後ろに並ぶ。Ⓣは「Bちゃん、えらいね。順番こだもんね。」と抱きしめ思い切りほめる。B児は満足そうな笑顔で、汽車ぽっぽの最後になりバスまで行くことができる。

＜考察＞

☆　その時、その時に応じた教師の提案で納得しバスまで行けるようになったのは、みんなで楽しくバスまで行けるいろいろな方法があることが分かってきたからであろう。それでもB児はずっと一番にこだわったり、教師と手をつなぎたがったりする気持ちが強かった。しかし、一番でなくても我慢し、N児に一番を譲り「順番で一番になろうね」と言えた。それは、

自分だけでなく、みんなも一番や教師と手をつなぎたい気持ちがあることに気付いたことと、自分も教師にほめてもらいたい気持ちが出てきたからであると考える。

◎　けんかやいざこざが多かった汽車ぽっぽであったが、いろいろな方法でバスまで行った教師の援助が、子どもたちにも気分転換になったようだ。また、Ｂ児が一番を譲れるようになったのは、Ｎ児が教師にほめられている姿を見たことや順番で一番になることを伝えてきた教師の援助が有効だったと思われる。Ｂ児も順番を譲ったことを教師にほめられとても喜んでいた。

エピソード2　「こっちのテーブルで」　＜7月上旬＞

お弁当の準備をしているとB児が、T児の隣に座っているN児を大泣きしてたたいている。N児も泣いている。Ⓣが「一体どうしたの？」と聞くと「BちゃんはTちゃんの隣に座りたいの！」「NちゃんもTちゃんの隣がいい！」と言い合っている。テーブルは他の幼児も座っていて空きがないが、隣のテーブルは空いている。「どうしようかぁ？」と聞いても二人とも譲る様子は見られない。T児に「じゃあ、Tちゃんこっちのテーブルでもいい？」と聞くと「いいよ。」と言ってくれる。Ⓣは「あ～よかった。」とT児を真ん中に並んで座れるよう、B児とN児のイスを隣のテーブルに移動する。「これでどうかなぁ？」とN児とB児に聞くと「うん、いいよ。」と二人とも答える。「よかったね。これならみんなで楽しく食べられるね。」とⓉが歩き出すと、まだ少し泣いているB児が後から追ってきて「先生、さっきはどうもありがとう。」とお礼を言う。ⓉはT児がテーブルを移動してくれたことをわかってもらいたくて「いいえ～、どういたしまして。Tちゃんがいいって言ってくれたからね。」と話す。その後、三人並んで座り普段と変わりなく、おしゃべりをしながらお弁当を食べる。

＜考察＞

☆　Ｂ児は少し強引ではあるが、自分の気に入った友達が見つかった。また、教師を追って素直に「ありがとう」が言え、楽しくお弁当を食べることが出来たのは、自分の思いをかなえてもらえうれしかったので、教師にお礼を言わなくてはいけないと考えたことと、自分だけでなく、Ｎ児もＴ児と一緒に座ってお弁当が食べたいことに気付いたからであると考える。

◎　Ｂ児が素直に教師に「ありがとう」と言え、三人で並んで普段と変わりなく食事ができたのは、Ｔ児と座りたいと思っていたＮ児・Ｂ児両者の気持ちを受け止めて、三人で座らせてあげたいと考え、空いているテーブルにＴ児に移動してくれるようお願いし、三人並んで座れるようイスを移動した教師の援助が有効だったと思われる。

エピソード3　「先生と遊ぼう！」　＜10月中旬＞

仲良し三人組のB児・N児・U児は、仲良く遊んでいたかと思うと「〇〇ちゃんが遊んでくれない。」と訴えてくることが多い。中でもB児が訴えてくることが多い。今日も「先生、NちゃんがBちゃんと遊んでくれない。」とⓉに訴えてくる。「どうして遊んでくれないの？」と聞くが「わかんない･･･。」と答えてくる。「Bちゃん、Nちゃんに何かしなかった？」と聞いても「してないよぉ。」と答えてくる。「なんか、いつもBちゃんたち、入れてくれないとか、遊んでくれないとか言ってるような気がするなぁ。」と話すと「だってNちゃんが遊んでくれないんだもん。」となぜ遊んでくれないかわからない様子である。「じゃあ、先生と遊ぶ？」と誘うと「うん！」と答える。B児がブランコで遊びたいと言ったのでブランコで遊んでいると、沢山の友達が集まってきた。その中にN児とU児の姿も見られる。人数が多くなってしまったので、砂場に行くことにする。山を作ったり、ごちそうを作ったりして遊んでいたが、自然と仲良し三人組がごちそうを作ってままごとを楽しんでいる。

何日か後、T児が「Cちゃんが遊んでくれない。」とⓉに訴えてきた。それを聞いていたB児は、「入れてって言ってきたら、ちゃんといいよって言わなくちゃいけないんだよね。Tちゃんがかわいそうだよねぇ。」と言ってくる。

＜考察＞

☆　Ｂ児は教師と一緒にＮ児がどうして遊んでくれないか考えたが分からなかった。しかし、気分を変えて教師と一緒に遊んでいると、自然に仲良し三人組で楽しそうに遊んでいた。ま

た、友達のいざこざの場面でＴ児を思いやる姿が見られたのは、自分が入れてもらえなかったり、遊んでもらえなかったりするといやな気持ちになり友達も同じだと気付き始め、「入れて」と言ってきたら「いいよ」と言ってあげるといいことが分かってきたからであると考える。

◎　仲良しの友達ができてくると、けんかやいざこざを繰り返しながらも一緒に遊びたがる。Ｂ児だけでなく、N児・U児も「遊んでくれない」「入れてくれない」と訴えてくることがあり、すぐに「なんで遊んでくれないの？」「一緒に遊びたいんだって」などと仲介をしていた。しかし、今回は一緒に遊びながら少し様子を見ていた。ブランコで遊んでいると偶然N児とU児が入ってきたことで、自然にかかわれるようタイミングを見計らい、みんなで遊べる砂場へ移動した教師の援助が有効であったと思われる。

Ⅴ. 研究の結果と考察

Ａ児・Ｂ児の抽出児のけんかやいざこざの場面で、幼児の変容の姿と育ちを分析し、教師の援助の考察を加えた結果、次のことが分かった。

○　Ａ児は、何事にも興味を示し活発に遊んでいた。Ａ児にとって、いろいろな遊具や用具がある幼稚園は大変魅力的な所であったようである。行動が先になってしまったり、自分の思いがうまく表現できなかったりしたことでＡ児は友達とのけんかやいざこざが目立ってしまった。２学期に入っても相変わらずけんかやいざこざがあったが、回数も減り、たたいたりひっかいたりすることも少なくなってきた。なかなか受け入れてもらえないこともあるが、気に入った友達も見つかり、友達とのかかわりも見られるようになってきている。Ａ児なりに集団生活の過ごし方や友達とのかかわり方が分かってきたようである。けんかやいざこざの後に安心して自分のやりたいことに取り組めるようになったのは、初めのうちは自己表出が十分できるようこだわりを認めて実現させたり､気持ちを紛らしたりする援助をしてきた。そして、だんだんと集団の中でのルールや遊びに必要な言葉、やってよいことや悪いこと、友達の思いを知らせたり、伝えたりしてきた教師の援助が有効であったと思われる。

○　Ｂ児は、素直で物おじすることなく友達とかかわろうとする気持ちがおう盛であったが、自分本位でけんかやいざこざが多くなってしまいがちであった。入園前は、同年齢の友達との遊びの経験も少なく、いつも自分の思い通りに過ごしてきたと保護者から聞いていた。何でも一番という自分優先のこだわりは３歳児特有の姿と考えられるが、Ｂ児は友達から「いつもずるい」と思われるようになってしまった。Ｂ児が、自分の好きな友達や遊びたい友達が見つかり、一緒に遊べるようになってきたのは、Ｂ児の思いを受け止めながら、幼稚園は家庭と違い何でも自分の思い通りにはならないことや、「自分がされたらどう思うか」など伝えたり、教師に認めてもらいたい気持ちを読み取り、友達や本人を思い切りほめたりした教師の援助が有効であったと思われる。

○　Ａ児・Ｂ児の事例からも、３歳児は入園前の状況や性格によって個人差が大きいことが再確認できた。5月から 11 月に生じたけんかやいざこざの場面の姿を見ていると､原因や過程、解決の時間、幼児の態度など確実に以前とは違ってきていると感じられた。その日の気分や状況によって「昨日は譲れたのに今日は譲れない」「昨日けんかしたのに今日は仲良く遊んでいる」といった場面が多く､けんかやいざこざの繰り返しの中で様々なことを学んでいき、幼児の変容が見られ育ちが感じられたと考えられる。また、安心して自分のやりたいことに取り組むためには、一人一人を温かく受け止め、まずは自己実現できるよう援助し、幼児の変容と育ちをとらえ、集団生活の過ごし方や友達とのかかわり方がわかるような教師の援助が有効だったと思われる。

VI. 研究のまとめと今後の課題

○　けんかやいざこざが多くなってしまいがちな３歳児であるが、「こだわり」や「自己主張」はわがままではなく自我の芽生えであり、自分の素直な表現なのである。幼児は様々な葛藤（かっとう）を起こしながら、集団生活の過ごし方や友達とのかかわり方を学んでいく。けんかやいざこざをマイナス面でとらえず、集団生活だからこそできる成長や学びのよい機会としてとらえ、援助していくことが大切だと分かった。

○　一人一人歩みは違うが、集団生活の中でけんかやいざこざの繰り返しから様々なことを学び、安心して自分のやりたいことに取り組めるようになっていく。幼児一人一人の変容をとらえ、何が育ってきているのか分析するのは難しい。しかし、これからも幼児一人一人の変容をとらえ、幼児の育ちに合った援助をしていかなければならないと考える。

＜参考文献＞

・小田　豊・神長　美津子　編著　『３才児保育のひみつ』ひかりのくに（1995）
・山岸　明子　編集　『新しい幼稚園教育要領と実践事例集第２巻』チャイルド本社（2000）